

性格の類似性と自己受容および他者受容が 印象形成に及ぼす影響

山尾 彰子
(発達教育学研究科心理学専攻)

吉村 英
(教育学科教授)

本研究は他者に対する印象評価に、他者との性格の類似性や自己受容、他者受容などの要因がどのような影響を与えるかについて実証的に検討することを目的としている。なお本研究では櫻井(2013)の定義に従い、自己受容を、「自分自身を歪めることなく認知した上で、その事柄が望ましいものでも、望ましくないものでも自分自身のこととしてありのままに受け入れることができること」とする。また他者受容は「他者が自分にとって好ましい側面を持っている場合も、好ましくない側面を持っている場合も、否定や拒否をするのではなく、その人の特性としてありのままに受け入れることができるということ」であると考え。印象形成については心理学辞典(有斐閣, 1999)の定義を用いて、「他者に関した限られた情報を手がかりとして、その人物の全体的なパーソナリティを推論すること」とする。

人は、意識的、無意識的に関わらず、瞬時に初対面の人物に対して何等かの印象を形成している。そしてその印象には大きく分けて2種類ある。1つは容姿や表情、服装などの外見についての印象であり、もう1つは性格や態度などの内面についての印象である。初めて会った人への第一印象は、外見で判断することが多いと思われるが、他人からある人物について紹介されたり噂を聞く時や、相手との関係を深めていくと性格や態度といった内面が重要になってくるだろう。印象形成の心理学的研究を開始したアッシュの実験(Asch, 1946)では、人は個々の情報を合成するのではなく、情報のなかの重要な部分(中心特性)に注目し、それを核にし

て他の情報を体制化させて全体印象を形成することを明らかにした。また、情報の呈示順序についても検討が行われ、初めの方の情報が最終的に形成される印象に大きな影響を及ぼすという初頭効果が見出されている。初頭効果の存在は、第一印象の重要性を示している。しかし、後の研究において、条件によっては逆の新近効果が生ずることも示されている。

人は暗黙のうちに、自分自身も持っている信念体系や価値判断を用いて、他者の性格特性間の相関関係や共変性の有無を仮定し、その人物を理解しようとする。人々がもつこのような素朴な人間観をL. J. クロンバック(Cronbach, 1955)は、暗黙の人格理論とよんでいる。同じ情報を与えられたとしても、この暗黙の人格理論により個人間で異なった印象を抱くことがあると考えられる。例えば、「冷静な」という特性を、「落ち着いている」「頼りがいがある」と肯定的に捉える人もいれば、「つめたい」「親しみにくい」と否定的に捉える人もいるだろう。このような捉え方の差は、これまでの経験に基づく個人の暗黙の人格理論によって生じると考えられるが、それに加えどういった特性を受容できるか、あるいは受容できないかという問題も深く関係していると思われる。

人は他者をポジティブに認知する傾向が一般にはあるが、他者の好ましくない情報は注意を引きやすく、いったんこうした情報に接すると、ネガティブ認知が優位になりやすくなると考えられている(社会心理学辞典, 2010)。前者のように他者をポジティブに認知する傾向はパーソンポジティブバイアス(Sears, 1983),

後者のようにネガティブな特徴に注意が向きやすくなる傾向はネガティブバイアス (Kanouse & Hanson, 1972) と呼ばれている。さらに、ポジティブな評価の印象 (好印象) よりも、ネガティブな評価の印象 (悪印象) の方が、持続しやすく覆しにくい (吉川, 1989) とされている。

他者認知には長所と短所のどちらを手がかりとしてよく用いるかを研究した北村 (1998) によると、他者の記述でのポジティブな性質は自分自身にあてはまるものが多いと判断され、特にあてはまりが強いものについては重要度も高いと判断される傾向が見られた。ネガティブな性質では自己にあてはまらないと判断されるものが多い。北村 (1998) はこの結果から、対人認知過程において自尊心維持のため、自己の長所が短所よりも手がかりとしてよく用いられることが多いのではないかと述べている。

バーンとネルソンの対人好意の強化説の実験では、実験で用いた態度表上の人々の態度と自分の態度との類似度が重要であり、特に類似の割合が高いほどその人に魅力を感じるという結果が得られている (Byrne & Nelson, 1965)。類似度が高いほど魅力的に感じるという結果は人格にもいえるのではないと思われる。中村 (1984) によると、一般的に知覚された類似性は、他者をポジティブに評価するように作用し、類似した刺激人物の方が非類似の刺激人物よりも好まれることを示している。しかし、Big Five 尺度の情緒安定性項目における類似性の検討を行った戸塚・上北・狩野 (2011) によると、ネガティブな性格特性である情緒不安定性に関しては類似していても他者の好意度を促進するという結果は得られなかった。また、向性の類似性と対人魅力については、集団的に理想の人格だとみなされている外向型の人物に対する魅力は、評定者の向性の特性を問わず圧倒的に強いことが分かっている (中里・井上・田中, 1975)。

自己受容と他者受容のバランス関係と精神的健康の関連を検討した櫻井 (2013) の研究では、他者受容の程度が低くても自己受容の程度が高

ければ精神的健康が高いということが明らかにされた。また、他者受容の程度が高くても自己受容の程度が低ければ精神的健康の程度は低いこと、さらに、自己受容・他者受容ともに受容の程度が高いほど精神的健康も高いということが示された。青年期の自己受容と他者受容の関連を調べた上村 (2007) の研究において、自己受容が高く他者受容が低いという、自己受容と他者受容のバランスを欠いた状態にあると、他者との共存を志向する社会適応性の弱さによって、良好な対人関係を保つことができないことが示唆されている。また同研究で、青年期後期において、自己受容と他者受容がバランスよく共存していることが、最も適応的で成熟した状態にあることが明らかにされた。

川岸 (1972) の研究で、他者受容の高い者の中で、自己受容の高い者は、気分の変化や劣等感が少なく、神経質でなく、活動的であること、他者受容の低い者の中で、自己受容の高い者は、抑うつ性や劣等感が少なく、協調的、活動的、社会的外向であることが明らかにされている。

自己受容と対人態度について研究した板津 (1994) は、自己受容的な人の特徴として、(a) 他者に信頼・愛情をもった態度をとりやすいこと、(b) 他者と対立したり他者に同調・依存的になったりしないこと、(c) 対人場面であまり孤独を感じないことの3つを指摘している。

上記で挙げたように、態度の類似度と対人魅力や印象の関係を調べた研究は多数あるが、受容という観点を取り入れた研究は少ないように思われる。しかしながら、印象形成に影響を与える要因としては、相手の性格などの他者要因、相手と自分自身の共通性や類似性などの相互的要因などに加えて、相手や自分自身をどの程度受容できるかという自己要因にも注目することが重要であろう。また刺激については、あらかじめ研究者側がポジティブ条件かネガティブ条件かを決めた刺激を用いるのではなく、印象評価者によって異なるであろう暗黙の人格理論に基づく評価によって好印象あるいは悪印象を抱くかについて検討したい。そして、その印象の違いは自己受容あるいは他者受容の違いによ

てどのような影響を受けるかについても検討を行いたい。これまでの研究では、自己受容あるいは他者受容の程度によって、さまざまな面で異なる特徴がみられている。自己受容・他者受容のバランスが精神的健康の程度や社会適応性につながることは明らかにされている。

そこで本研究では、まず自己受容、他者受容および類似性の要因が他者評価にどのような影響を与えるのかについて検討を行いたい（目的1）。そのため、自己受容および他者受容をそれぞれ高群、低群の2群に分け、自己受容（高、低）×他者受容（高、低）の計4群を設けて比較を行う。

自己受容と他者受容がバランスよく共存している者は、不適応的で未熟な傾向が弱く、適応的かつ成熟した傾向の強い個人志向性と社会共存性がバランスよく共存している状態にある（上村，2007）。したがって特性を客観的に捉えるとともに、与えられた情報の中で評価者自身が良いと感じた部分（ポジティブな情報）を特に重視して捉え、類似他者・非類似他者の両者を受容すると考えられる。ゆえに、自己受容と他者受容がともに高い群は、類似他者と非類似他者のどちらに対してもより肯定的な印象を抱くであろう（仮説1）。

自己受容が高く、他者受容が低い者は、強い自己実現特性を持つ一方、他者との共存を志向する社会適応的特性が弱いという特徴が見られる（上村，2007）ことから、他者との共存がしにくい中で、類似他者に対しては自己の特性と共感できる部分があるため肯定的に捉えるであろう。一方、非類似他者には自己との共通性が低く否定的に捉えると考えられる。よって、自己受容が高く、他者受容が低い群は、類似他者に肯定的な印象を抱き、非類似他者には否定的な印象を抱くであろう。また、自己受容が低く、他者受容が高い者は、自己実現特性が弱く、他者への一方的な依存や過剰適応的傾向が見られる（上村，2007）ことから、自分に自信がなく、自分の欠点を満たしている他者に憧れや理想を投影し、非類似他者に肯定的な印象を抱く。一方、類似他者に対しては自己を重ね合わせ、否

定的な印象を抱くと考えられる。ゆえに、自己受容が低く、他者受容が高い群は、類似他者には否定的な印象を抱き、非類似他者には肯定的な印象を抱くだろう（仮説2）。

自己受容と他者受容がともに低い者は、ポジティブな個人志向性とポジティブな社会志向性も弱く、さらにネガティブな社会志向性は強く、4群の中で最も不適応的で未熟な特徴が見られる（上村，2007）。適応性が弱く、与えられた情報の中で評価者自身が良くないと感じた部分（ネガティブな情報）を特に重視し、類似・非類似に関わらず他者に対して否定的な印象を抱く傾向があると考えられる。したがって、自己受容と他者受容がともに低い群は、類似他者と非類似他者のどちらに対しても、やや否定的な印象を抱くだろう（仮説3）。

さて、上記の目的1では類似と非類似を比較することを目的とした。つぎに、目的2では類似性についてさらに詳しく検討したい。類似しているといっても、自他共に外向的である場合と自他共に内向的である場合もある。また非類似といっても、自己が内向的で他者が外向的な場合と、自己が外向的で他者が内向的な場合がある。このような違いが他者評価に影響を与えている可能性もある。そこで目的2では、対象者の性格と自己の性格と自己受容の関連性について分析を行いたい。対象者および自己の性格については、外向・内向の次元を用いる。向性次元と性格の類似性において、類似性に関係なく内向型の刺激人物よりも外向型の刺激人物が好まれている（Hendrick & Brown, 1971）。また、他者が自己と類似した特性をもつと知覚することで、その特性に対してポジティブに評価するといわれている（Ajzen, 1974）。これらの主張をふまえ、他者との類似にかかわらず理想的だと思われる性格特性をもつ他者を肯定的に評価するのではないかと思われる。さらに、自分自身を受け入れているかどうか性格特性に対する評価にも影響を与えているのではないかと考え、自己受容と印象評価との関連性についても検討を行いたい。

方法

調査対象者

女子大学生237名を対象として調査を行った。年齢は18から24歳までで、平均年齢は19.3歳 ($SD = 1.18$) であった。回答が不十分である1名を除き、236名のデータに基づいて分析を行った。

調査時期

2016年4月から5月にかけて実施した。

調査方法

集団調査法による質問紙調査。数回に分けて調査期間中に授業時間を使用して質問紙を配布し、その場で回答を求めて回収した。研究倫理を配慮して、質問紙の冒頭で回答は無記名であること、および守秘義務の順守について記載し、さらに口頭で調査への参加は任意であること、および回答したくない項目は記入しなくてよいことを伝えた。

質問紙の構成と調査項目

本研究における質問紙は、フェイスシート、Big Five 短縮版、自己受容尺度、他者受容尺度、印象評価のための刺激文と質問項目という5つの部分から構成されている。

(1) フェイスシート 対象者の年齢、バイト経験の有無、サークル経験の有無について尋ねた。

(2) Big Five 短縮版 調査対象者の負担を減らすことを考慮し、和田 (1996) の Big Five 尺度を元に並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口 (2012) が作成した Big Five 短縮版 29項目を使用した。Big Five と同じ情緒不安定性、外向性、開放性、調和性、誠実性の5つの下位尺度から構成される。当てはまらない(1)～当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。

(3) 自己受容尺度 櫻井 (2013) によって作成された自己受容尺度19項目を使用した。全体としての自己の受容、望ましい自己の受容、現状満足の3つの下位尺度から構成される。当てはまらない(1)～当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。

(4) 他者受容尺度 櫻井 (2013) によって作成された他者受容尺度17項目を使用した。因子

分析の結果、1因子構造であることが確認されている。当てはまらない(1)～当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。なお、質問項目5と14において、質問文の内容が分かりにくかったため修正した。質問5は「他人が自分より劣っているとき、その人のことを認めたくない」となっていたが、「自分が他人より劣っているとき、その人のことを認めたくない」に修正し、質問14は「他人と意見が一致しているとき、言い争いになる」となっていたが、「他人と意見が一致していないとき、言い争いになる」とした。

(5) 刺激人物 (Aさん) の情報と印象評価 架空の人物 (外向的な人) を紹介した文章を提示し、その人物に対する印象を尋ねた。12個の形容詞とその人物と友人になりたいかを問う項目で印象を測定した。当てはまらない(1)～当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。

(6) 刺激人物 (Bさん) の情報と印象評価 Aさんとは対照的な架空の人物 (内向的な人) を紹介した文章を提示し、その人物に対する印象を尋ねた。12個の形容詞とその人物と友人になりたいかを問う項目で印象を測定した。当てはまらない(1)～当てはまる(4)の4件法で回答を求めた。

(7) 自己との類似性の判断 評価者と刺激人物との類似性を調べるために、自分自身がAさんとBさんのどちらに似ていると感じたかを尋ねた。

刺激材料

印象評価で用いる刺激文は、Big Five の第1因子である外向性因子の項目を元に作成した。調査対象者が女子大学生のため、身近に感じられるように女子大学生という設定にした。以下にその全文を示す。

刺激文 (外交的な人)

Aさんは女子大学に通う大学生です。バイトをしていて、サークルにも所属しています。活発であり、話すことが好きで、友人も男女を問わずたくさんいます。人前で話すことに抵抗はなく、誰にでも自分の意見を話すことができます。休日は、友達と買い物やカラオケに行く等、外で過ごすことが多いです。授業には遅刻や欠

席をすることもあり、テスト前には友人からノートを借りています。

刺激文（内向的な人）

Bさんは女子大学に通う大学生です。バイトはしておらず、サークルや部活には所属していません。大人しく口数は少ないですが、親しい友人とは何でも話せるような関係です。人前で話すことが苦手で、対立する意見は言い出せないことがあります。休日は、音楽を聴いたり読書をしたりして、家で過ごすことが多いです。授業には毎回出席し、ノートもきちんと取っているのでテスト前にはノートを貸して欲しいと頼まれることもあります。

刺激文が外向的あるいは内向的であるかを調べるために、女子大学生44名（平均年齢20.3歳、SD = .959）を対象として操作チェックを行った。両刺激文の人物についてどのような印象を抱いたかを、新性格検査の外向因子10項目とYG性格検査の社会的内向・社会的外向9項目を用いて、当てはまらない(1)～当てはまる(5)の5件法

で尋ねた。表1は各項目の平均値と標準偏差を示したものである。t検定の結果19項目中18項目において有意差がみられた。いずれの項目においてもAさんの方がBさんより外向的であると判断されていた。

結果と考察

印象評価の因子分析

刺激人物の印象に対する認知構造を明らかにするために、印象評価の測定に用いた12項目の測定値をもとに因子分析を行った（最尤法、プロマックス回転）。固有値の推移および解釈可能性から因子数を2個に決定した（表2）。第1因子は固有値5.613、プロマックス回転後は「思いやりのある」「親切的な」「責任感のある」「まじめな」「頼りない」「軽率な」の6項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「社会的望ましさ」の因子であると考えられる。第2因子は固有値1.826、プロマックス回転後は「積極的な」「明るい」「社交的な」

表1 刺激人物（Aさん・Bさん）の印象

	Aさん		Bさん		t	p
	M	SD	M	SD		
話好きである	4.89	0.32	2.84	0.99	13.1	***
人と広く付き合うほうだ	4.86	0.35	1.64	0.69	24.2	***
無口である	1.23	0.42	3.66	1.01	-14.6	***
自分はわりと人気者だ	4.34	0.61	2.32	0.91	10.8	***
生き生きしていると人に言われる	4.45	0.59	2.23	0.80	13.5	***
陽気である	4.59	0.73	2.14	0.67	16.3	***
初対面の人には自分の方から話しかける	4.48	0.66	1.80	0.80	14.9	***
よく人から相談を持ちかけられる	3.30	1.00	3.66	0.96	-1.5	n.s.
話題には事欠かないほうだ	4.34	0.53	2.45	0.82	11.3	***
誰とでも気さくに話せる	4.73	0.45	1.95	0.71	20.8	***
色々な人と知り合いになるのが楽しみである	4.61	0.49	2.07	0.63	19.3	***
知らない人と話すときはたくなる	1.89	1.10	4.27	0.85	-9.8	***
こちらから進んで友達を作ることが少ない	1.89	0.99	4.05	0.91	-8.7	***
目立つようなことは好まない	1.55	0.59	4.25	0.87	-14.6	***
異性の友達はほとんどできない	1.34	0.75	3.73	0.92	-12.7	***
人と広くつきあうのが好きである	4.82	0.39	1.80	0.67	23.6	***
誰とでもよく話す	4.77	0.42	1.84	0.75	21.0	***
新しい友達はなかなかできない	1.52	0.76	3.73	0.95	-10.8	***
人中に出てもまごつかない	4.39	0.75	1.98	0.79	12.3	***

表2 印象評価項目の因子分析結果

	F1	F2
F1: 社会的望ましさ ($\alpha = .855$)		
思いやりのある	.963	.414
親切な	.939	.373
責任感のある	.796	
まじめな	.671	-.312
頼りない	-.603	-.207
軽率な	-.572	.253
F2: 活動性 ($\alpha = .838$)		
積極的な	-.210	.758
明るい	-.249	.743
社交的な	-.332	.660
意欲的な	.343	.593
親しみにくい	-.113	-.570
冷たい	-.350	-.473
因子相関	—	-.685
		—

「意欲的な」「親しみにくい」の5項目に高い因子負荷量を得ている。したがってこの因子は「活動性」の因子であると考えられる。なお、項目4の「冷たい」はどちらの因子にも含まれなかった。それぞれの因子に高い因子負荷量を持つ項目の評定値から平均値を算出し、因子の得点とした。

自己受容尺度と他者受容尺度による調査対象者の分類

各調査対象者の自己受容尺度の得点を合計し、

平均値 ($M = 50.36$) を算出した。合計得点がこの平均値よりも高い者を自己受容高群 ($N = 118$)、低い者を自己受容低群 ($N = 113$) とした。同様に、各調査対象者の他者受容尺度の得点を合計し、平均値 ($M = 53.47$) を算出した。合計得点がこの平均値よりも高い者を他者受容高群 ($N = 126$)、低い者を他者受容低群 ($N = 105$) とした。印象評価者が自分と刺激文のAさん(外交的な人)あるいはBさん(内向的な人)のどちらに似ているかを尋ねた質問項目において、Aさんを選んだ人が117人で、Bさんを選んだ人が111人であった。なお、Aさんを選択した場合、Aさんが類似他者、Bさんが非類似他者となり、Bさんを選択した場合は、Aさんが非類似他者、Bさんが類似他者となる。

自己受容と他者受容および類似性(目的1)

社会的望ましさ因子への自己受容と他者受容および類似性の影響

表3は、各条件の平均値を示したものである。自己受容(高群・低群)の要因、他者受容(高群・低群)の要因および類似性(類似・非類似)の要因の3要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。ただし類似性は繰り返し要因である。類似性と自己受容の交互作用が有意であった($F = 36.710$, $df = 1/216$, $p = .000$) (図1)。また、他者受容の主効果も有意であった($F = 26.132$, $df = 1/216$, $p = .000$)。しかしながら、類似性の主効果、自己受容の主効果、他者受容と類似性の交互作用、自己受容と他者

表3 各条件の平均値と標準偏差(社会的望ましさ×自己受容×他者受容)

	自己受容	他者受容	平均	標準偏差	度数
社会的望ましさ(類似)	低群	低群	2.96	.727	71
		高群	3.32	.632	41
	高群	低群	2.55	.582	51
		高群	2.61	.735	57
社会的望ましさ(非類似)	低群	低群	2.56	.717	71
		高群	2.67	.719	41
	高群	低群	3.01	.716	51
		高群	3.25	.702	57

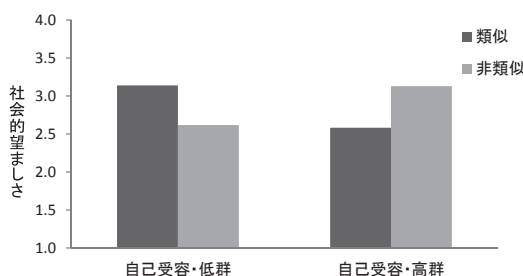


図1 社会的望ましさをの平均値 (類似性×自己受容)

受容の交互作用, 自己受容と他者受容と類似性の2次の交互作用は有意ではなかった。

他者受容の主効果が有意であることから, 他者受容が高い群は低い群よりも社会的望ましさをへの評価が高いといえる。また他の要因との交互作用がみられないことから, 他者受容の要因に関しては社会的望ましさを評価する際, 類似・非類似という要因は影響しないと考えられる。さらに2次の交互作用がみられなかったことから, 社会的望ましさを因子については仮説1, 2, 3は支持されなかった。

類似性と自己受容の1次の交互作用が有意であったため, 単純主効果の検定を行った。類似における自己受容の単純主効果が有意であった ($F = 30.52, df = 1/216, p = .000$)。また, 非類似における自己受容の単純主効果も有意であった ($F = 30.71, df = 1/216, p = .000$)。したがって, 類似した他者の社会的望ましさを評価する際に, 自己受容の高い群よりも低い群の方が, より高く評価しており, 類似していない他者の社会的望ましさを評価する際は, 自己受容が低い群よりも高い群の方が, より高く評

価している。さらに, 自己受容低群における類似性の単純主効果が有意であった ($F = 16.20, df = 1/216, p = .000$)。また, 自己受容高群における類似性の単純主効果も有意であった ($F = 16.86, df = 1/219, p = .000$)。

自己受容低群では自己と類似していない人よりも類似している人の社会的望ましさを高く評価し, 自己受容高群では社会的望ましさを自己と類似している人よりも類似していない人の社会的望ましさを高く評価するということが明らかとなった。

自己受容高群では自己を受容できており, 自尊心や自信があることで類似していない他者でも相手の長所を素直に受け止めることができると考えられる。したがって, 非類似他者の評価が高くなったのであろう。しかし, 自己受容低群においては現実の自己を受容できていないため, 自身と類似した他者を認めることで自尊心を守るための防衛的な反応をしているのではないかと思われる。それゆえ, 類似他者の評価が高くなったと考えられる。

活動性因子への自己受容と他者受容および類似性の影響

表4は, 各条件の平均値を示したものである。自己受容 (高群・低群) の要因, 他者受容 (高群・低群) の要因および類似性 (類似・非類似) の要因の3要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。類似性の要因は繰り返し要因である。印象と自己受容の交互作用が有意であった ($F = 29.509, df = 1/219, p = .000$) (図2)。また, 他者受容の主効果も有意であっ

表4 各条件の平均値と標準偏差 (活動性×自己受容×他者受容)

	自己受容	他者受容	平均	標準偏差	度数
活動性 (類似)	低群	低群	2.55	.668	72
		高群	2.58	.776	43
	高群	低群	3.04	.712	51
		高群	3.26	.795	57
活動性 (非類似)	低群	低群	2.91	.746	72
		高群	3.21	.791	43
	高群	低群	2.64	.672	51
		高群	2.56	.833	57

た ($F = 11.873, df = 1/219, p = .001$)。類似性の主効果, 自己受容の主効果, 自己受容と類似性の交互作用, 他者受容と類似性の交互作用, 自己受容と他者受容の交互作用, 自己受容と他者受容と類似性の2次の交互作用は有意ではなかった。したがって, 他者受容の主効果が有意であったことから, 他者受容が高い群は低い群よりも活動性への評価が高いといえる。また他の要因との交互作用がみられないことから, 他者受容の要因においては活動性を評価する際に, 類似・非類似という要因は影響しないと考えられる。さらに2次の交互作用がみられなかったことから, 活動性の因子についても仮説1, 2, 3は支持されなかった。

類似性と自己受容の1次の交互作用が有意であったため, 単純主効果の検定を行った。類似における自己受容の単純主効果が有意であった ($F = 36.33, df = 1/219, p = .000$)。また, 非類似における自己受容の単純主効果が有意であった ($F = 17.41, df = 1/219, p = .000$)。したがって, 類似した活動性を評価する際に, 自己受容の低い群よりも高い群の方が, より高く評価しており, 類似していない活動性を評価する際は, 自己受容が高い群よりも低い群の方が, より高く評価している。さらに, 自己受容低群における類似性の単純主効果が有意であった ($F = 12.27, df = 1/219, p = .001$)。また, 自己受容高群における類似性の単純主効果も有意であった ($F = 16.86, df = 1/219, p = .000$)。したがって, 自己受容低群では自己と類似している人よりも類似していない人の活動性を高く評価し, 自己受容高群では活動性が自己と類似していない人よりも類似している人の活動性を

高く評価するということが明らかとなった。

自己受容が高い人は自分と似ている人に自身を重ね合わせることで親近感を抱くことで類似他者を高く評価し, 自己受容が低い人は自己とは類似していない人に憧れや理想を抱き非類似他者を高く評価しているのではないかと考えられる。

社会的望ましさについても活動性についても仮説1, 2, 3は支持されなかった。しかしながら, 両因子において類似性と自己受容の1次の交互作用がみられた。社会的望ましさにおいては, 自己受容高群では類似他者よりも非類似他者を高く評価し, 自己受容低群では非類似他者よりも類似他者を高く評価している。一方活動性においては, 自己受容高群では非類似他者よりも類似他者を高く評価し, 自己受容低群では類似他者よりも非類似他者を高く評価している。この違いは, 社会的望ましさと活動性の因子の違いであると思われる。社会的望ましさは「思いやりがある」「親切な」のような他者に対する配慮であり他者から評価されるものであるため, 他者から見れば社会的に望ましい人物であったとしても自分自身では社会的望ましさがあるかどうかは判断しづらい。その上, 社会的望ましさを持つ人ほど, 自分を望ましいとは思っていない可能性もある。しかし活動性は対人関係や物事への取り組み等から自分自身で活動的であるかどうかは容易に判断できるだろう。さらに活動的な性格は一般的に望ましいとされるため, 自己受容高群において自分自身と似た人を高く評価したのではないだろうか。この両因子がもつ対称性によって反対のパターンの結果になったのではないかと考えられる。

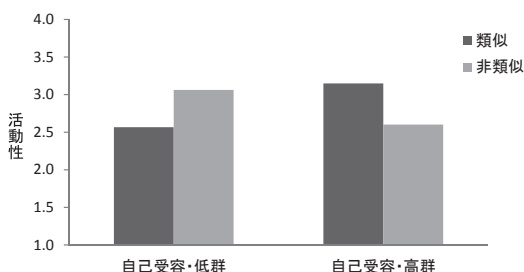


図2 活動性の平均値 (類似性×自己受容)

対象者の性格 (外向・内向), 自己の性格 (外向・内向) および自己受容 (目的2)

自己の性格と自己受容が他者の性格の社会的望ましさ因子への評価に与える影響

表5は, 各条件の平均値を示したものである。自己の性格 (外向的・内向的) の要因, 自己受容 (高群・低群) の要因および他者の性格 (外向的・内向的) の要因の3要因で1要因に繰り返

表5 各条件の平均値と標準偏差 (社会的望ましさ×自己の性格×自己受容)

	自己の性格	自己受容	平均	標準偏差	度数
社会的望ましさ A	A (外向的)	低群	2.29	.485	38
		高群	2.23	.403	74
	B (内向的)	低群	2.21	.444	75
		高群	2.27	.428	34
社会的望ましさ B	A (外向的)	低群	3.36	.498	38
		高群	3.53	.396	74
	B (内向的)	低群	3.50	.388	75
		高群	3.35	.441	34

返しのある分散分析を行った。他者の性格は繰り返し要因である。他者の性格の主効果が有意であった ($F = 682.178, df = 1/217, p = .000$)。また、自己の性格、自己受容、他者の性格の2次の交互作用が有意であった ($F = 6.044, df = 1/217, p = .015$) (図3, 図4)。自己の性格と他者の性格、自己受容と他者の性格の交互作用は有意ではなかった。2次の交互作用が有意であったので単純交互作用の検定を行った。他者の性格 (内向的) における自己の性格と自己受容の単純交互作用が有意であった ($F = 7.19, df = 1/217, p = .008$) が、これ以外の単純交互作用は有意でなかった。自己の性格と自己受容の単純交互作用が有意であったので単純・単純主効果の検定を行った。自己受容 (高群) における自己の性格の単純・単純主効果が有意であった ($F = 5.08, df = 1/217, p = .025$)。自己の性格 (外向的) における自己受容の単純・単純主効果が有意であった ($F = 4.72, df = 1/217, p = .031$)。自己受容 (低

群) における自己の性格の単純・単純主効果が有意傾向であった ($F = 2.79, df = 1/217, p = .096$)。自己の性格 (内向的) における自己受容の単純・単純主効果が有意傾向であった ($F = 3.02, df = 1/217, p = .084$)。自己の性格 (外向的・内向的) と自己受容 (高群・低群) の全ての組み合わせにおける他者の性格の単純・単純主効果は有意であった (表6参照)。

自己を外向的だと評価した人は、自己受容低群よりも高群の方がBさん (内向的) の社会的望ましさを高く評価していることから、自己受容が高く自己を客観的に見て受け入れている人は、自分と類似していないことで自己の性格とは異なる部分が強調されるのではないだろうか。さらに社会的望ましさは理想的な性格であると思われるため、自己とは非類似な相手であっても自己受容が高い人の方が低い人よりも高く評価したのではないかと考えられる。自己受容高群において自己を内向的であると評価した人よりも外向的であると評価した人の方がB

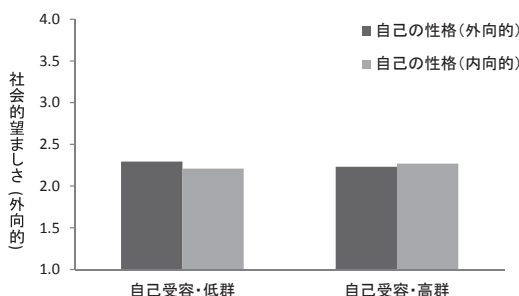


図3 Aさん (外向的) の社会的望ましさ (自己の性格×自己受容)

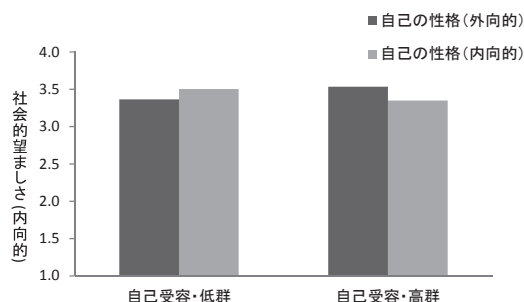


図4 Bさん (内向的) の社会的望ましさ (自己の性格×自己受容)

表6 単純・単純主効果の結果（自己の性格×自己受容×他者の性格）

単純・単純主効果	要因の組み合わせ	水準の組み合わせ	df	F	p
自己の性格	自己受容×他者の性格	低群×外向的	2	1.01	.317
		低群×内向的	2	2.79	.096
		高群×外向的	2	.19	.664
		高群×内向的	2	5.08	.025
自己受容	自己の性格×他者の性格	外向的×外向的	2	.41	.521
		外向的×内向的	2	4.72	.031
		内向的×外向的	2	.65	.421
		内向的×内向的	2	3.02	.084
誤差			217		
他者の性格	自己の性格×自己受容	外向的×低群	2	108.94	.000
		外向的×高群	2	313.93	.000
		内向的×低群	2	314.04	.000
		内向的×高群	2	98.98	.000
誤差			217		

さんへの評価が高かったことについても同様に、自己を受容している人の方が客観的に自己と他者との違いに注目しやすく、社会的望ましさという特性自体を理想的なより良いものとして評価したのではないと思われる。

自己の性格と自己受容が他者の性格の活動性因子への評価に与える影響

表7は、各条件の平均値を示したものである。自己の性格（外向的・内向的）の要因と自己受容（高群・低群）の要因と他者の性格（外向的・内向的）の要因の3要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。他者の性格は繰り返

返し要因である。他者の性格の主効果が有意であった（ $F = 590.418$, $df = 1/22$, $p = .000$ ）。自己受容の主効果は有意であった（ $F = 3.970$, $df = 1/220$, $p = .048$ ）。自己の性格と他者の性格、自己受容と他者の性格の交互作用、自己の性格、自己受容、他者の性格の2次の交互作用は有意ではなかった。

自分自身が外向的あるいは内向的であっても、内向的な人よりも外向的な人の活動性を高く評価している。他者の性格が外向的か内向的に関わらず、自己受容高群の方が低群よりも活動性を高く評価していることから、活動的であるという性格を理想的な人物であると捉えている

表7 各条件の平均値と標準偏差（活動性×自己の性格×自己受容）

	自己の性格	自己受容	平均	標準偏差	度数
活動性A	A（外向的）	低群	3.36	.573	39
		高群	3.59	.380	74
	B（内向的）	低群	3.50	.410	77
		高群	3.52	.403	34
活動性B	A（外向的）	低群	2.46	.358	39
		高群	2.53	.384	74
	B（内向的）	低群	2.51	.300	77
		高群	2.49	.421	34

のではないと思われる。

まとめと今後の課題

本研究では女子大学生を対象として、性格の類似性と自己受容、他者受容が印象評価にどのような影響を与えているかについて検討を行った。他者の印象については、社会的望ましさと活動性の2因子に分かれた。

自己受容低群では自己と類似していない人よりも類似している人の社会的望ましさを高く評価し、自己受容高群では社会的望ましさが自己と類似している人よりも類似していない人の社会的望ましさを高く評価するということが明らかとなった。自己受容高群では自己を受容できしており、自尊心や自信があることで類似していない他者でも相手の長所を素直に受け止めることができると考えられる。さらに、自己受容低群では自己と類似している人よりも類似していない人の活動性を高く評価し、自己受容高群では活動性が自己と類似していない人よりも類似している人の活動性を高く評価するということが明らかとなった。したがって、自己受容が高い人は自分と似ている人に自身を重ね合わせることで親近感を抱くことで類似他者を高く評価し、自己受容が低い人は自己とは類似していない人に憧れや理想を抱き非類似他者を高く評価しているのではないと思われる。これらの結果は、社会的望ましさ因子、活動性因子の両方において目的1で立てた仮説1、2、3のすべてが支持されなかったことを示している。また、印象評価において他者受容は主効果のみで他の要因との関連は見られなかった。他者受容が高い人は他者をより高く評価するということが明らかとなった。

目的2より自己の性格と自己受容が他者の印象評価に与える影響において、社会的望ましさ因子の評価では自己を外向的だと評価した人は、自己受容低群よりも高群の方がBさん(内向的)の社会的望ましさを高く評価し、自己受容高群において自己を内向的であると評価した人よりも外向的であると評価した人の方がBさんを高く評価していた。また、活動性因子では

自分自身が外向的あるいは内向的であっても、内向的な人よりも外向的な人の活動性を高く評価していることが明らかとなった。これらの結果から、中里ら(1975)やHendrick & Brown(1971)が述べたように自己との類似性よりも社会的望ましさと活動性といった性格特性が肯定的に評価されているのではないと思われる。

最後に今後の課題についていくつか述べたい。本研究では、性格については外向性と内向性を取り上げたが、他の性格特性についても検討する必要があるだろう。例えば情緒不安定性や調和性などの性格特性についても、自己と他者の類似性が印象形成にどのような影響を与えるかについて実証的な検討を行えば、興味深い知見が得られるのではないだろうか。また本研究では刺激文をより身近に感じられるように刺激人物を女性とした上で、女子大学生のみを調査対象者にした。しかしながら性格の類似性が印象形成に与える影響は、男性と女性で異なる可能性もある。また刺激人物が同性か異性かによっても異なる可能性がある。したがって今後は男子学生も含めた大学生全体を対象とした検討を行う必要があるだろう。

引用文献

- Ajzen, I. (1974). Effects of information on interpersonal attraction: similarity versus affective value. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 374-380
- Asch, S. E. (1946). Forming Impressions of Personality *Journal of Abnormal and Social Psychology* 41, 258-290
- Byrne, D. & Nelson, D. (1965). Attraction as a Linear Function of Proportion of Positive Reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 659-663
- Cronbach, L. J. & Meehl, P. E. (1955). Construct validity in psychological tests *Psychological Bulletin* 52, 4, 281-302
- 板津裕己(1994). 自己受容性と対人態度との関わりについて *教育心理学研究*42, 86-94
- Hendrick, C. & Brown, S. R. (1971). Introversive extraversion and inter-personal attraction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 20, 31-36
- Kanouse, D. E. & Hanson, L. R. (1972). Negativity in evaluations. Kanouse, H. H.

- Kelly, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (Eds), *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, NJ: General
- 川岸弘枝 (1972). 自己重要と他者受容に関する研究—受容測度の検討を中心として—*教育心理学研究* 20, 3, 170-178
- 吉川肇子 (1989). 悪印象は残りやすいか? 実験社会心理学研究第29, 1, 45-54
- 北村英哉 (1998). 自己の長所, 短所は他者認知によく用いられるか *教育心理学研究* 46, 403-412
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (1999). *心理学事典* 株式会社有斐閣
- 中村雅彦 (1984). 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果 *実験社会心理学研究* 23, 2, 139-145
- 中里浩明・井上徹・田中国夫 (1975). 人格類似性と対人魅力—意向性と欲求の次元— *心理学研究* 46, 2, 109-117
- 並川努・谷伊織・脇田貴文・熊谷龍一・中根愛・野口裕之 (2012). Big Five 尺度短縮版の開発と信頼性と妥当性の検討 *心理学研究* 83, 2, 91-99
- 日本心理学会 (2010). *社会心理学辞典* 丸善株式会社
- 櫻井英未 (2013). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係 *日本女子大学人間社会研究科紀要* 19, 125-142
- Sears, D. O. (1983). The person positivity bias. *Journal of Personality and Social Psychology* 44, 2, 233-
- 戸塚唯氏・上北彰・狩野勉 (2011). 情緒安定性の類似が対人魅力に及ぼす効果 *千葉科学大学紀要* 4, 45-53
- 上村有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連: 個人志向性・社会志向性を指標として *発達心理学研究* 18, 2, 132-138